

令和元年度第2回葉山町総合教育会議 会議録

- 1 開会年月日 令和元年11月20日(水)
- 2 開会場所 保育園・教育総合センター 会議室2
- 3 出席委員 町長 山梨崇仁  
教育長 返町和久  
教育長職務代理者 鈴木伸久  
委員 小峰みち子  
委員 水沢 勉  
委員 下位勇一
- 4 出席職員 教育部長 沼田茂昭  
教育総務課長 虫賀和弘  
学校教育課長兼教育研究所長 瀧名恵美子  
生涯学習課長 井上尚美  
図書館長 野田 仁
- 関係者 葉山小学校校長 富樫俊夫  
上山口小学校校長 滝川真砂美  
長柄小学校校長 岡部厚子  
一色小学校校長 安達禎崇  
葉山中学校校長 加藤雄司  
南郷中学校校長 益田孝彦
- 5 議長 町長 山梨崇仁
- 6 書記 教育部長 沼田茂昭
- 7 開会 午前10時00分

(開会宣言)

教育部長) 定刻になりましたので、ただいまから令和元年度第2回葉山町総合教育会議を開会いたします。

冒頭しばらくの間、事務局で進行させていただきますので、よろしくお願いいたします。

会議の構成につきましては、葉山町総合教育会議設置要綱第3条により、町長及び教育委員をもって構成することとなっております。本日は構成員全員が出席であることをご報告いたします。

時刻は10時でございます。

本日の配付資料を確認させていただきます。1点目、会議次第、2点目、学校と地域の連携について、6校分でございます。不足等ございますか。大丈夫でしょう

か。

それでは、会議次第に沿って議事に入ってまいります、その前に、教育委員及び学校長の皆様におかれましては、本日の総合教育会議につきまして、初めて出席される方がおいでですので、議事に入ります前に、それぞれ自己紹介をお願いしたいと存じます。それでは、お願いします。

町 長) おはようございます。葉山町長を務めております山梨崇仁です。よろしくお願いいたします。

教 育 長) おはようございます。教育長の返町です。よろしくお願いいたします。

鈴 木 委 員) 教育委員の鈴木でございます。よろしくお願いいたします。

水 沢 委 員) 教育委員の水沢と申します。よろしくお願いいたします。

小 峰 委 員) 同じく小峰でございます。よろしくお願いいたします。

下 位 委 員) 11月1日から教育委員に任命いただきました下位と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

葉山小学校長) おはようございます。葉山小学校で校長を務めております富樫と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

上山口小学校長) おはようございます。上山口小学校校長の滝川と申します。よろしくお願いいたします。

長柄小学校長) 長柄小学校校長、岡部と申します。よろしくお願いいたします。

一色小学校長) 一色小学校校長、安達です。よろしくお願いいたします。

葉山中学校長) 改めまして、おはようございます。葉山中学校校長の加藤でございます。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

南郷中学校長) 南郷中学校の益田です。どうぞよろしくお願いいたします。

教 育 部 長) ありがとうございます。それでは、会議次第に沿って協議事項に入ってまいります。本会議は地方公共団体の長が招集することとなっておりますので、これ以降の進行は山梨町長をお願いしたいと存じます。町長、よろしくお願いいたします。

町 長) よろしく申し上げます。それでは、初めに傍聴の方がお1人ということで、進めさせていただきます。

それでは、本日は協議事項に係る状況を詳しく伺うために、葉山町総合教育会議設置要綱第5条の規定により、各小・中学校6校の校長先生方にお越しいただいてございます。その上で、本日の式次第に従って協議を進めてまいりたいと思います。

協議事項の1、学校と地域の連携について、副題は地域と共に作る学校を目指して。協議事項2、その他でございます。協議事項につきまして、皆様からご異議、ご意見等ございませんでしょうか。

では、式次第にのっとりまして進めてまいりたいと思います。

会議録の作成上、ご発言の際は挙手をお願いをいたします。私のほうから指名い

たしますので、その上でご発言をお願いいたします。

(学校と地域の連携について～地域と共に作る学校を目指して～)

町 長) それでは、協議事項の1、学校と地域の連携についての議題に入りたいと思います。まず、本議題につきまして、事務局より趣旨のご説明をお願いいたします。

教育部長) それでは、本日の協議事項について、趣旨を説明させていただきます。平成27年12月にとりまとめられた、中教審答申「新しい時代の教育と地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働のあり方と今後の推進方策について」では、地域社会のつながりや支え合いの希薄化等による地域の教育力の低下などが指摘され、加えて、学校が抱える課題は、より複雑化・困難化が進んでいるとしております。こういったことから、「時代の変化に伴う学校と地域のあり方」「地域とともにある学校への転換」「学校運営協議会制度、いわゆるコミュニティスクールの推進」などが答申のポイントとなっております。

国では当該答申を踏まえ、学校運営協議会の設置の努力義務化などを内容とする「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正が行われ、平成29年4月1日より施行されております。神奈川県では今年度、全ての県立高校、中等教育学校に学校運営協議会制度を導入しております。また、本町の学校と地域の連携としては、学校運営協議会制度の導入はしていないものの、各小学校では地域の方のご協力による米づくりや南郷中学校のFGC活動を初めとする特色ある学校づくりに取り組んでおります。

そこで、本日の総合教育会議では、こういった国・県の動向を踏まえ、本町の現状や今後の展望などについて協議していただきたいと、そのように考えたものでございます。以上です。

町 長) ありがとうございます。今の説明に対して質問等よろしいでしょうか。

それでは、協議事項としまして、今の内容について校長先生の皆さんからご説明、各学校についての取り組みなどをご説明いただきたいというふうに思います。では、順番に。富樫先生から、では、よろしく申し上げます。

葉山小学校長) では、改めまして、よろしくお願いいたします。それでは、本校の地域との連携、そしてコミュニティスクール導入に向けてということでお話をさせていただきます。

まず、本校は学校運営方針の中で、保護者・地域から信頼される学校という項目を設けさせていただいております。その中で、3点挙げさせていただいております。1つ目が、地域の人材・教育力の活用に努め、体験活動の充実としての授業の充実を図るということ。2点目が、関係機関と連携・協力し、児童の健全育成をはかる。3つ目といたしまして、地域との情報交換を密にし、学校教育についての理解を得るということを学校運営方針の一部にさせていただいております。それを踏まえま

して、現在の学校と地域の連携、まずそのところからお話をさせていただきます。先ほどお話にもありましたとおり、本校でも米づくりを5年生の社会科、それから総合的な学習の時間に合わせて実施をさせていただいております。こちらは、日本の伝統文化のわらを使ったお飾りのづくり、そういったところの発展も含めて総合的な学習の時間というふうに捉えさせていただいております。子どもたちが具体的にどんな文化があるのだろうかという、探求的な学習の一環の一つとして学習しております。

具体的な中身はそこに記載をさせていただいておりますが、米をつくる一連の過程を学習しますが、もちろん全てではなく、その一部という体験的なところになっておりますが、田起こし、しろかき、田植え、それから特徴的なのが夏休みの草取りもさせていただいております。ともすると田植えをして稲刈りまでというところになりますけれども、やはり農業をする、米づくりをする上で大変なところは何だろうというところの子どもの課題意識のところからも、草刈りですとかそういったところもさせていただいております。また、稲刈り、脱穀、餅つき、こういったことを田んぼの持ち主の方より年間を通してご指導いただいて学習しております。

その他、木遣り歌の学習、これは4、5年の音楽にかかわるものでございます。単元としては、伝統的な音楽というところがございまして、地域の相州葉山一色木遣り保存会の方にお越しをいただきまして、その木遣り歌のスタートといえますか、発祥のところから具体的な木遣り歌のご紹介をいただいて、子どもたちもできる限り歌ってみて、どういう感じがするかということを含めて学習しております。

3つ目といたしましては、6年生のこれは特別活動として、伝統文化の学習として葉山の若葉会の方にお越しいただきまして、盆踊り体験をしております。これはただ踊って終わるのではなくて、どうしてこのような文化が生まれたのかということも含めて学習をさせていただいております。

次に5年生の家庭科の学習としての「だし」の学習です。葉山の若宮会の方のお力をお借りしております。なかなか食事というものは隠れた味の「だし」、ここのところを子どもたちが理解しないまま、生活をしているところは非常に多いところがあるかと思えます。そういったところで、「だし」のところを含めて学習させていただいております。なお、この葉山若宮会の方につきましては、葉山の健康増進計画、食育推進計画の中でも実施計画の中で取り上げていただいているものでございますので、地域の方と連携させていただいております。

それから、3年生の社会科での地域学習がございまして、石井牧場さんとか新善光寺、実教寺さん、地域にある資源を見学の学習の場としてご提供いただいて、学習をさせていただいております。これ以外にも3年生の社会科では、町の公共施設にもご協力をいただいて、学習させていただいております。町庁舎、消防署、図書館、さらに県の施設になりますが、葉山警察署など、地域にある公共施設が、いわゆる

普通のお店ではない。私たちにどうかかわって生活の中にお力をお借りしているかという学習をしております。行政という言葉は直接まだ使いませんが、その一端の学習を進めていく。公共施設という学習を進めるため3年生でさせていただいているところでございます。

行政としてどんな方がどんなお仕事をしているかを見学するのは、非常に重要な位置づけとっております。特に、どんな仕事をしているか、子どもたちに伝わりにくいのが町役場でございます。そこに行く自分たちが生活する上でとても大事な部署がたくさん入っているということを学習させていただいております。今回の見学の折には町長室も拝見させていただいて、町長にもお話をいただきました。本当にありがとうございました。

それから地域行事、学校の運動会でございます。これは地域行事としても大きな位置づけを占めさせていただいております。6年生のソーラン節では町内会よりはっぴをお借りをして、表現「ロックソーラン」で活用をさせていただいております。それから、日ごろ学校がお世話になっている方々もご招待させていただいて、様子を見ていただくというのがございます。

7つ目に着衣泳で、葉山ライフセービングの方々にもお越しをいただいて、学年を限定しておりますが、毎年該当の学年で実施させていただいております。これが主なものですが、実はこれ以外にも幾つかございまして、今年春の遠足で行こうと思っていたんですが、天候不順のため中止となりました、例えば6年生の長柄桜山古墳ですが、このときには地域の保存会の方にも講師になっていただく予定でございました。

以上が教育課程に係る主なものを挙げさせていただいたところです。それ以外のところにつきまして、学校と連携しているものは、避難所の運営委員会がございまして。こちらは町内会長さんとの連携を非常に強く持たせていただいております、学校としても町内会長さんとお顔を直接合わせてお話ができるよい機会となっております。それから、先ほども出ました町の公共施設ですとか、子ども育成課が中心となって実施していただいている「ふれあい教室」ですとか、地域の見守り活動として、子どもたちの通学の安全を図っていただいているところでございます。

続きまして、コミュニティスクール導入に向けてということで、今後の展望のところをお話をさせていただきます。先ほど部長からご説明がありましたとおり、学校が学校だけで教育を進めていくということは、非常に難しい状況になっています。そこで、学校運営協議会、コミュニティスクールというものはどういうものかというのを、私が出席する会議ではできる限りPTA、地域の方々にご説明をさせていただいております。どの場面かといいますと、そこに記載させていただいておりますので、ごらんいただければと思います。運営委員会、学級委員会等々でございます。ただ、そこでは課題もございまして、1月に管理職研修会で研修会をさせていた

だきましたが、そこにいらしていただいた方がその市のPTA会長さんと生涯学習関係、社会教育関係の担当者の方でございました。学校運営協議会の実施主体は誰かということがございます。実施主体が学校でなく地域であるということをお話の中で力説をされていまして。「長くにわたって持続可能であるためには、学校からお願いされているからやっているのではなく、地域としてやっていくんだと。そこが大きい」と話されていまして。

2つ目でございますけれども、この運営協議会が、形式的なものになってはいけないと思っております。形の上で、校長の方針を聞いて、はい、そうですかということではなくて、具体的にどうしていくかということが大事であると思っております。すいません、長くなりました。以上でございます。

町 長) ありがとうございます。質疑は後ほど行いますので、引き続き説明をお願いいたします。では、滝川先生、お願いいたします。

上山口小学校長) 上山口小学校です。よろしくお願いいたします。本校は、開校から本年度で64年になります。上山口と木古庭の2地区が学区になっています。前身の分教場の時代からですと、あと五、六年で150年になるということを知っており、歴史のある学校です。地域の住民の学校に対する愛着は非常に深く、地域に根差した学校であると思っております。

教育資源にも大変恵まれており、人材を活用した教育活動を、これまで広く行っております。資料には、その主な内容を低学年・中学年・高学年、そして全校という形でまとめさせていただいております。低学年は炭焼きの体験、こんにゃくづくり、麦の脱穀、幼稚園との交流やモンゴル講座、養蜂の見学、みかん狩り、「めぐりの森」の植樹活動を6年生と一緒にするなど、いろいろ取り組んでいます。

中学年は、シイタケの駒打ち、上山口児童館にあります絵屏風や棚田の見学、野鳥の観察なども行っています。

高学年は、学校のすぐ近くを流れる下山川の生物の調査、タケノコ掘り、環境体験授業。これはアースエコという団体に来ていただいて、環境についての学習をします。それから2年生と一緒に湘南国際村の「めぐみの森」での植樹活動などを行っています。

全校では、ふれあい給食会、これは、地域の人をお招きして給食を食べます。それからサツマイモ、ジャガイモ、ダイコンなどの苗植えをしており、地域の方に指導をお願いしています。つい先週も焼きいも大会を全校で実施しました。

それから、これはお母さん方のボランティアですが、読み聞かせの活動なども行っています。地区にある棚田は非常に貴重なものだと思っておりますが、これまであまり子どもが見に行く機会がなかったため、今年は5年生に稲刈りの体験をさせていただきました。来年度は田植えからかかわらせていただけるとありがたいなと思っております。

学区には木古庭児童館と上山口児童館の2つの児童館があります。放課後はかなりの数の子どもたちが児童館に行きますので、児童館とのつながりも非常に重要です。学校では見せない子どもの姿が地域の児童館では見られるということもあります。児童館の方に学校に来ていただき、会議に参加していただく中で児童の情報を共有しています。

2つの地区は地域の行事も盛んです。夏のお祭り、正月のどんど焼きなど、地域のお祭りには、大勢の子どもたちが集まってきます。子ども会が中心になって行う行事もあり、子どもたちは地域の方々に育てられていると感じます。地域の行事や町内会の会合には学校の教職員も参加させていただいています。

学校運営方針の中で、「地域環境を生かした教育活動の展開を図る」という一言を盛り込んでいます。教育課程の見直しという意味で社会に開かれた教育課程を実現するために、教職員の中でこうした地域の方の力を借りた行事の見直しを行っていかうという声があり、本年度の校内研究の重点課題としています。来年度の新学習指導要領の実施を踏まえ、子どもたちにどのような目的で、どのような力をつけさせていくかというところを明確にする必要があります、地域とのつながりを大切にしながら、行事の精選を進めているところです。

今後の展望についてですが、上山口小学校はコミュニティスクールの設置について、そうした基盤があるように思います。ただ、これまでの人材を生かす取り組みだけではなく、それをさらに教材化し、子ども自身が自主的に、主体的に動く取り組みを行っていかねばなりません。

昨日校長研修があり、その中で秦野の校長先生からコミュニティスクールのお話を伺う機会がありました。秦野のコミュニティスクールの実践が進んでいるということで、どのように立ち上げたんですかと質問してみました。まず推進校の視察を行い、地域の方という条件で、学校ボランティアの募集のポスターやチラシを作成したそうです。学校のメール配信にボランティア専用のQRコードを載せて、そこでボランティアを募ったというお話もありました。また、学校で、月に1回、開放日というのを設けたり、学校の図書館を開放したりなどという活動もされているということでした。

特別なことを立ち上げるのではなく、また、新たなことをするのでもなく、今まで学校がやってきたことに、地域の方のお力を借りるということで、「それほど大変ではないですよ」というお話でした。むしろ逆に、地域の方がすごく力になってくれるのでありがたい、教職員の仕事がすごく軽減化されているということでした。軌道に乗れば学校がすごく助かるのかなという印象を持ちました。地域の方は、とても建設的な意見をおっしゃってくださるということで、その辺についても学校が新しいことを考えていくきっかけになるような気がします。

ただ、課題もあります。学校に来ていただく方はほとんどがご高齢の方。町内会

の会長さんは、「もう9年も町内会長をやっているんだ。なかなか後継者がいなくてね」とおっしゃっています。継続がなかなか難しいのはうちの地区だけではないようにも思います。

また、教員の働き方改革が言われている中で、教職員の土曜日・日曜日の休日参加や時間外勤務がなかなか難しい状況です。コミュニティスクールは、学校にとってもメリットがあると思われます。学校と地域が連携し、一体となって子どもの指導に当たることができるようになると良いと思います。

町 長) ありがとうございます。では、続きまして岡部先生、お願いします。

長柄小学校長) 長柄小学校です。よろしくをお願いします。当たり前じゃないかと思われることもあるかもしれませんが、今どんな形で地域とつながっているかということを挙げさせていただきました。

まずは、学校だよりを地区会長さん、それからあと白寿会の会長さんにも配付しております。そして、地域で回覧していただいていると聞いております。中には毎回お送りすると、お手紙をいただく方もいらして、こんなことが気になりましたとか、いいことばかりではなく、そこは気をつけてくださいねなんていうお手紙もいただいたりしています。

それから2番目が学校行事などを積極的に見ていただいて、子どもたちの様子、学校の中の様子を見ていただいているということがあります。

それから、通学路での見守りは、学校からの依頼ではなく、ずっと続けていってくださって、本当に雨の日も風の日もという感じでやっていただいている方々なので、子どもたちとも顔見知りで、よく声をかけてくださっています。

この旗振り活動には2つケアがあるといいますか、地域の中から自己発生的にどうか、安全部のような組織があってやってくださっている部分と、町主導で声をかけて集めてくださっている部分があるので、両面があると思います。

それから、前校2校にもありましたように、学習活動においても地域の人材ということで、このような1年生から6年生まで、このことにかかわっていただいております。特に1年生の昔遊びについては、今までは学校と、いらしていただく白寿会の皆様と、その2つのつながりだけだったんですけども、それを町の研究所がとりもってくださっているような形で進めていたものを、一旦これを高齢化とかご負担とか、教育課程の見直し、そういうことがあって、昨年で一旦停止しますということでやめたものを、今年PTA主催のお祭り、学校内のお祭りに、ぜひそういう方々を呼べないかという保護者の方からのお申し出があって、お声がけしたところ、すごく快く参加していただきまして、午後のひととき、土曜日ですけれども、昔遊びをたくさん教えていただいたという、形を変えて続いているという部分があります。

これ以外にも、幼保小連携ということで、幼稚園・保育園の方、それからここに



はちょっと書いてないんですけども、先ほどお話があった児童館の方々との情報共有をさせていただいているということがあります。

ほかにもたくさんあると思うんですけども、主立ったものを載せさせていただきました。

今後の展望についてです。今、長柄小学校のPTA活動は、任意の団体といいながらも、全家庭がご参加いただいて、PTA組織といえば長柄っ子の応援団なんだということを旗印にして活動していただいております。これを地域のほうに広げていくということで、皆さんで学校を応援してくださいというような、そんな形で入っていくのがいいのかなというふうに思っています。こういうところを学校の中で支援したり、お手伝いしていただけるといいんじゃないかなということを挙げさせていただきました。

1点は、見守りボランティアということで、通学路だけではなく、校内でも、これは実際にやっている学校があったので、ここに挙げたんですけども、研究授業等で先生たちが自分の教室を離れて、別の教室を見に行くときに、廊下の見回りをして、子どもたちの安全を守ってくださるというような、そんなこともやってはどうかと思っています。

それから、特にこれは前段にある今までのことを生かしてという意味ですが、特に総合的な学習の時間において今までもお世話になっている、例えば田んぼであるとか、例えば異文化の学習であるとか、そういうところも地域の人材資源としては活用というのを何というのか、今、本当に去年やっていたからとか、割と慣例的にやっている部分があるので、そこをきちんと整理して、計画的に1年生から6年生まで、かかわっていただくといいかなと思っています。

それから、総合的な学習の時間だけにとどまらず、やはり学習のフォームですね、やはり子どもによってかなりやりたい速度というのが、ゆっくりやりたい子もいるし、授業だけで終わってしまう子もいるし、おうちに帰ってからやりたい子もいるし、いろいろな子がいる中で、いろんな対応をやっぱり教員だけではやりきれない部分もありますので、例えば放課後であるとか、学校内だけでなく、子どもたちが行った児童館であるとか、そういうところで勉強を教えてくださいというような、そういう動きができたらいいなというふうに思っています。

また、クラブ活動などにも中学校のように、例えばそういうコーチを呼ぶとか、そういうことも小学校でもできるのではないかなというふうに思っています。

校務ボランティアと最後につけさせていただきました。これについてはいろんなハードルがあるかとは思いますが、今言われている働き方改革の部分で、もしかしたら地域の方にお問い合わせできる部分もあるのではないかなということも課題として考えていきたいというふうに思っています。

以上が教育ボランティアの導入ということですが、それ以外でも、地域で取り組

む行事、これも例えば防災訓練も去年は町の防災訓練ということで、町主導のもとやっていたかもしれませんが、地域で校内の避難訓練とか、それにとどまらず、地域の防災訓練ができたらいいかなとか、あるいは、これちょっと希望で書いたんですけども、地域スポーツ大会とか、それから今年実際にやってみたんですが、フレンドシップ広場にいろんな、先ほどの昔遊びだけに限らず、大学生であるとか、いろんな地域の方の参加を得て、いろんなことをご指導していただけますので、そういうことも広げていけるといいなと思っております。

最後に、校長としての役割は、一番最初に戻りますけれども、学校だより等を通して、学校はこういうことを目指しているんだということを地域の方と共有できるように発信すること、それから地域のキーパーソンと、やっってくださいと丸投げではなくて、キーとなる方々とつながって、その方にご協力いただきながら、学校と地域とつながっていくということが必要かなというふうに思っております。以上です。

町 長) ありがとうございます。続きまして一色小、お願いします。

一色小学校長) 一色小学校です。小学校の4番目の報告ということになるので、まず地域との連携という点におきましては、葉山の学校4校とも今、3人の校長がお話したようなことが一色小にも行われていて、一色小の米づくりは歴史が長くて、もう20年近くになるんですけども、他校もどんどん取り組むようになって、今では4校とも取り組んでいるし、各校にある見守り、これも本当にありがたいことで、1番目に見える地域の方にお世話になっていることです。地域の方を主体的にと言ったら失礼ですけども、本当に主体的にやったださっている活動だと思えます。私も週に1回、朝、回っているんですけども、本当に雨の日も風の日もということで、頭が下がります。やっぱりそういうところで気になってしまうのが、この方に何かお礼したいなという気持ちになっちゃうんです。でも、それがいいのか悪いのかというのは置いておいて、でもそういうところに本当に地域の方が、頑張ってくださいっているなということを感じています。

読み聞かせにしても、あと地域見学にしても、着衣泳等にしても、他校と同じくうちの学校でもやっているの、ほぼ4校大体似たようなかわりの活動はあるのかなという中で、私のレポートはちょっと見にくくて申しわけないんですけども、一色小だけかなと思われるものについて特筆して書かせていただきました。

1つは、避難所運営委員会、これもどこも立ち上がったんですが、本校の場合は自主訓練が大分定着していて、今年で3回目。自分たちでやろうというところできているのが特徴かと思われ。もう一つはアマモということで、これはかつての今井校長が取り組んだものですけども、4代の校長にわたって一色はずっと続けてきている取り組みなので、学校の特徴かなと思って書かせていただきました。

地域との連携というところなんですけれども、まず、避難所運営については、ご

承知のとおり現南郷中校長の益田校長が着任と同時に、ものすごいパワーで立ち上げて、一色地区につくったものです。たまたま私、校長研究会で地域のネットワークを生かした教育活動づくりというのを発表させていただく機会があり、益田校長に立ち上げ経緯を聞いたところ、避難所運営をやったほうがいい、3.11以降そういうことが必要だ。これは大義名分…大きな目標なんです、益田校長としてはまさに地域のネットワークをつくりたかったとのことでした。自分と、葉山の人、一色の人とつながりたいんだと、そういう思いがあって、この避難所運営のシステムを立ち上げた。私などは地元の間人です、かつて一色小にも勤務していたんですけれども、この避難所運営委員会に参加して思うことは、こんなに地域に、地域のことを考えて、学校に協力してくれるメンバーっているんだということでした。自分がやってみて気づかされるわけです。だから、人というのはいっぱい学校に何かしてあげたいんだけど、そのチャンスがないとか、こちらからなかなかそのピンポイントで、ここをかゆいところをかいてほしいというお願いができてないというところがあったりする中で、どこをどう生かすのかというのをひとつ教えられたような気がしました。

その避難所運営委員会をやっていく中では、町内会長さんなり、防災関連の団体さんなり、つながっていくわけですけれども、先ほど上山口の校長先生からあったように、町内会長って、なかなか手がなくて、かわっていかないんです。なので、訓練を重ねていくうちに、どんどん深まっていくんです、関係が。そうすると、その方を核にして、周りの副会長さんとか、うちの町内会ではというような話になっていき、地域、学区の中でのそれぞれの町内会がどういうことを第一に取り組んでいるのかとか、あるいは地域独自のお祭りや、地域独自の訓練に参加させてもらおうと、地域の子どもたちがいる中で、こういうふうな暮らし方をしているんだとか、そういう様子が見えてきて、その中から本来避難所運営ということで集まっていた中では、そんな特技があったのかとか、そういうことを発見していくことができ、すごくそこはこの取り組みの中から学校がいい情報を得ているなどというふうに感じています。

もう一つのアマモのほうですけれども、これも今も同じようにアマモの育苗から種の取り出しからということをして4年生がやらせていただいているんですが、研究発表したときに、葉山町の濱名課長から指導・助言をいただきまして、それはそれでいいんだけど、それがもう慣例化しちゃってるんじゃないから、その取り組みが総合的な学習の中で縦横の軸の中で有機的に生かされていくか、今後の環境問題、環境教育のほうまで発展させられるようにしないと、ただやっているだけだよということをご指摘いただき、ああ、確かにそのとおりだなということがあり、今後についてはこのアマモの取り組みについてはどのように発展させられるか、として考えていきたいと思っております。ただ、漁協や鹿島建設、民間の会社やら、

そこが関わってくださっていて、かつそれが 13 年間続けさせていただいているというのは、一つの伝統にもなっていると思うので、これはもう、うまく今後も使うという言い方は失礼ですけど、教育活動に取り組んで、取り組まさせていただきたいなと思っています。

今後の展望なんですけれども、今のお話の中にもあったんですが、この活動をやるから、その活動がいいということではなく、その活動をやることによって人脈ができていくというか、例えば避難所運営一つとってみても、町内会長に輪番で運営委員長をやってもらうんですけれども、この間の台風のときには誰が来てくれたとか、実際に動く中で、頼りになる人というのはだんだん見えてくるなというのがあります。益田校長からも聞いた話なんですけれども、回数を重ねていくと、その地域の中で本当に核になる人って誰だろうってわかるよねという話があって、例えばそういう方が学校のコミュニティスクールの運営会議ができたときに、リーダーになってくれるといいのかなというような気がしています。それが1つ。

もう一つは、アマモに代表される場所については、その地域の中で、いつ、どこで、どのようなことがあって、あるいはどういう特技を持っている人がいてというのを、校長だからつき合えるネットワークがあるわけで、そのネットワークの中で逃さず発見し、それをどういうふうにし組みとして学校に入れられるのか、また仕事をどう振り分けるのかというのを考えることが、今、一色小では今後の課題として必要なというふうを考えております。

何か新しいことをがつつり創作していくんじゃなくて、一色小らしくできるにはどうしたらいいのかというのを考えたいと思っています。以上です。

町長) ありがとうございます。では、引き続き加藤校長、お願いします。

葉山中学校長) では、よろしく願いいたします。中学校の立場で、まず私のほうからは、なぜ学校と地域の連携が重要なのか、また必要を感じているのかというような視点からお話を申し上げたいと思います。

もう御存じのとおり、子どもたちを取り巻く社会の状況でございますが、都市化であるとか過疎化の進行、また少子高齢化、はたまたグローバル化、IT化などの進展によりまして、子どもたちをめぐる社会的な環境が激変しております。それに加えて、価値観・ライフスタイルの多様化などを背景にして、地域におけるつながりが希薄になったり、あるいは地域や家庭の教育力が下がってきたりというような、さまざまな課題が指摘されているところでございます。そうした中で、学校では、いじめであるとか不登校などへの対応、あるいは課題を抱えた支援の必要な子どもたちの増加、こういった学校の直面する課題がより一層複雑化・困難化しております。こうしたことで教職員の業務が増加し、長時間労働もまた今、深刻な課題としてクローズアップされているところでございます。

さらには 2050 年問題というようなところも視野に入れながら、先行き不透明な社

会の中をたくましく生き抜く力を子どもたちがどのようにしたらつけられるかということに常に視点を置きまして、学校で取り組んでいるところでございます。

中でも、地域連携については、学校や家庭での教育だけではなく、社会のさまざまな世代のさまざまな主体が、多様な形で学校教育にかかわることで、働くことや、自立すること、社会への参画、文化の伝承など、多様な姿を子どもたちに示すことによって、社会を生き抜く力が少しでも高められていくのではないかと考えます。この点において、本校の教育を特色づける取組の一環として重要視しているところでございます。

事前に提出させていただいたレジュメのほうをご参照いただくと、まず1番目の現状については、そこにさまざま事例を記載させていただいております。中核になる学校評議員会から6のその他まで、改めてこうやって書き出してみますと、地域の教育力あるいは地域人材の方々をいかに活用させていただいているのかなというふうを感じるところでございます。あえて書かなかったものは、部活動のコーチとか指導員等について書いてございません。それから、小学校でも特色ある学校づくりとして、何点か紹介されておりましたが、本校でもいくつかございます。まず5番のキャリア教育ですね。1年次における職業調べ、2年次における職業体験で、先般終わったところでございます。そしてまた3年次の進路学習会ということで、3年間を通して自分の人生を計画していくとか、将来像を描いていくというような取組をしております。そこでお力を貸していただけている地域の方々には、本当にありがたく感じております。

それから、6番のその他の中には、ふれあい講座がございますね。これは2月、3月の頃に行う授業でございまして、文化的な分野を中心に、講座を20ぐらい設定いたしまして、子どもたちが講師である地域の方々とまさしくふれあいながら、さまざまな文化活動に取り組むというものでございます。また、ここ二、三年の取組なんですけど、命の授業といたしまして、心肺蘇生、AED講習等をロータリークラブの肝入りで、協働という形で取り組んでいるところです。いざ急を要するときに、他者を助けられるような力や技能をつけていくとか、あるいは自分の命を守っていくような力をつけるための取組で、この授業も年々災害が増える中で重要度が増しているように感じております。

いずれにいたしましても、子どもの環境を、教育環境を充実させるためには、学校・家庭・地域それぞれの教育機能の充実を図るとともに、相互の連携を強化しまして、学校・家庭・地域が一体となって子どもの教育に取り組む環境づくりが必要であると強く感じる次第でございます。

さて、2番目の今後の展望についてでございますが、新学習指導要領が間もなく完全実施になるところでございます。その中で、社会に開かれた教育課程の実現が目指されていることが一つ大きなかぎとなりますし、これまでさんざん話し合いが

行われてきました中教審での、こちらのほうの答申も含めて考えてみますと、今後コミュニティスクールの設置というのは、地域とともにある学校への転換を図るために、本当に有効であると思われまます。ということから、今後どこの学校においても重要な取組になっていくのかなというふうに予想しているところです。

恐らく葉山町でも近々にこの導入が開始されると思いますが、その際は町の施策として教育振興基本計画等への位置づけであるとか、あるいは設置目的を明確にさせていただいた上で、町教委には学校運営協議会規則の作成、さらにはこれに関しての説明、研修等を通して、教職員、保護者、地域住民あるいは関係各団体に向けた制度の周知をともにお願ひできればなというふうに思います。

私なりに考えた導入後のメリットなんですが、学校評議員制度から学校運営協議会制度への発展によりまして、組織的・継続的な連携・共同体制が確立できることをはじめ、数々メリットが想定されます。自分といたしましても、現職として時間がある限りこれに取り組んでいきたいと考えております。以上です。

町長) ありがとうございます。それでは最後になります、益田校長、お願いします。

南郷中学校長) では、私が発言したいことは、ほとんどレポートの中に書かれておりますので、レポートを読んでいくような形になりますが、お許してください。

学校運営方針の柱の一つに、「地域を愛し、地域から愛される学校」を掲げて、地域に開かれた学校を目指し、地域教育力、地域資源の積極的な活用に努めています。具体的には、「FGC はやまびと」に取り組むこととし、葉山町への愛着心を培っています。

その前提条件として、私が大切にしているのは、学校から発信する情報の量及びその質的な透明性です。その具体を月4回程度の学校だよりと、月1回程度の学校だより地域版の発行で担保しています。地域に隠し立てのない正直な学校があることが、地域と学校を結ぶ信頼関係の第一歩だと捉えています。学校だよりを補完するものとして、学校ホームページの随時更新も大切に捉え、実践しています。もう一つ的前提条件が、学校評価のPDCAサイクルの完成です。保護者や生徒の意識をアンケートを通してクリアにし、施策や方針がどのくらい効果や達成度を示しているかを把握し、学校がよりよくなるための改善案をサイクルの中で示していくことが重要だと考えています。南郷中学校はその前提条件はクリアした状態にあります。つまり、次の段階に進めるレディネスを備えています。

長柄小・南郷中合同避難所運営委員会の開催で、地域との関係をより密接にし、南郷中学校教育懇話会では「南郷中を取り巻く安全」というテーマで、地域間で意見交流できる段階にまで進めることができました。学校が地域から一定の信頼を得ることができている現状までつくり上げることができています。その背景に、南郷中学校の生徒集団自体が非常に現在よい状況にあり、信頼を勝ち得てくれていることも大きな要素だと考えています。ここまでの状況がつくれれば、次に目指すのは

コミュニティスクール化であると言えると考えています。

今後の展望です。かぎを握るのは、学校関係者評価委員会にどんな方を加えて、学校運営協議会を改編していくかです。現在の学校関係者評価委員会のサイズ感はとてもよいので、その感じを崩さずに、今以上に地域の意見を引き出せるメンバーをふやす努力がないと、船が山を登ってしまうことでしょう。先日、学校関係者評価委員会で話した内容の中では、13人から15人ぐらいが一番、地域を巻き込んで、いい数かなみたいな話し合いがなされました。また、地域のコーディネーターには、現在さまざまな地域協力団体の協力を得ている「FGC はやまびと」の活動を十分に理解していただいて、学校の先生のかわりに同質の行事を学校や学年の意向を正しく反映してプロデュースしていただけることがかぎとなります。学校社会というのは、ちょっと残念なものですけれども、新しいものに基本的には拒否反応というか、まずはどうだろうなという反応を示す部分があります。その性質を打ち破るのは、担当教諭が奮闘してきたこの役割を肩代わりしてくださるのが、コミュニティスクール化の大きな魅力であると感じてもらうことが重要なのです。お徳感が十分に伝わってこそでない、教員集団の懐疑的という表現がいいかどうか分かりませんが、「新しいものなの」みたいな見方は崩せないです。そして、すぐれた地域コーディネーターを輩出していくには、教育委員会の予算措置が必要なのは言うまでもないことかなというふうに考えているところでございます。

最後に、学校として大切な姿勢が、地域に寄り添う姿勢が地域に伝わっていることです。例えば、今回台風による停電被害で、長柄地区を中心に南郷中学校区はかなり不平・不満がたまる状況が生まれたことは事実です。地域から具体的な不満の声が役場に数多く寄せられたようです。南郷中も停電復旧において、通常6時間授業による学校再開といった内容をメール配信いたしました。このとき地域に「子どもが辛いのでは」という声があることを察知しました。この声は重要であるし、この声を上げさせてはだめなのです。地域に寄り添う学校なら、もっと配慮のある学校再開を配信すべきだったと思っています。地域とより上手にやっつけられる関係づくりを行っていく必要が、思った以上にあることを心に刻みたいと思います。

その例として、最後にお話するのは、19号のときにも避難所運営を行いました。その際に、いわゆる高齢者避難みたいな情報に関して、地域から避難してくる人たちを迎えたわけですが、地震の避難所とは考え方をころっと変えて、なるべくサービス精神のあふれた避難所を目指しました。避難所は不自由するところだという考えではなく、コンセントをたくさん用意したりとか、湯沸かしポットを設置したりとか、扇風機とか敷物とか、そういうのを用意したりとか、あとルールはこういうふうになっていますみたいな説明とか、ラジオ放送もラジオを3台持ち込み、情報飢餓に陥らないみたいな形で、できること、停電までの時間までできるかもしれませんというような内容とともに、そういった姿勢で、とにかく皆さんが住みやすい

ような避難所をつくるのが、地震とは違ってできました。そういったやり方も、避難所でそんなサービスをしてしまったら、今後が大変だろうというような言い方もあるかもしれませんが、私は地域とのいい関係をつくるためには、必要な一つの方策ではないかなというふうに思っているところです。

以上で私の報告を終わります。

町 長) どうもありがとうございました。それでは、まず初めに、各学校の取り組みについて、現状ということでご報告をいただいた部分もございました。内容についてまずは質疑という形で、委員の皆様から何かありましたら、確認ということも含めて挙手をお願いできればと思います。

教 育 長) どうもありがとうございました。質問というふうな形になってしまうと、ほとんど先生方のお話に対する評価みたいになってしまいますので、時間もかかるから、これ以上言いません。まずはお礼を申し上げたいのと、ただ、一つ一つの学校の話ではないという前提でお話しさせていただきますと、今回このテーマにしたことについては、もちろん事務局と協議するわけですが、あるきっかけが私の中ではありまして、夏前の長柄小学校の学校だよりの中で岡部校長が、これからの学校というのは地域に支えてもらうとか、助けてもらうということではなくて、地域とともにつくる学校に転換するというようなことを、タイトルに近いところにお書きだったんです。恐らく職員に向けて、ある決意を促すような、鼓舞するような、そういう意味でお書きになったんだと思うけれども、非常にいい言葉だなと思いついて、それを今回も副題として付けさせていただきました。

その言葉の中には、2つの意味が当然あるわけで、地域とともにつくるということに関して言うと、以前と同じように地域が支えるということの共通性・連続性があるわけです。それを前提とした上で、でも全体としてはグレードアップしているということ、ともにつくと表現した。助けてもらうということは、一種の外部性がある、そこから援助をもらうとかと、そういう関係だったものを、完全に外部性は切れないと思いますけれども、一緒につくるとか、接合させるとかというような、そういうイメージでグレードアップしようということを含んでいますので、大変いい話だなというふうに思っておりました。

なぜ接合するのか、どういうふうに接合していくかというようなことに関しては、加藤校長がレジュメにまとめられたようなこともあって、実際そういう意味での大きな時代の要請ということになるかと思えます。その要請に応える形の 하나가、コミュニティスクールというふうな制度であって、今回この協議題を採用し、皆さん方にあらかじめご用意をお願いしたことの中に、単なる現状報告にしないでください。将来展望も必ず入れてくださいというふうな要望をしたのは、そういう意味です。そのことにちゃんと応えていただきまして、コミュニティスクールにつなげるような展望を皆さんお書きくださった、お話しくださったというふうに思っています。



す。そのことに関してもお礼を申し上げるし、実はこのことは、個々の学校の実情に合わせた将来へのステップの中の一段階であるという意味もあるけれども、一方、加藤校長が明確に指摘されておられましたけれども、そのことは第2次葉山町教育総合プランの中でコミュニティスクールについて研究に取り組むというようなことを表現させていただきました。あれから一定年数が経過をしまして、これからは当然、実行を前提とした検討とか、あるいは文字どおり実行の段階に入っていくのかと思います。そういうことを同じレベルで、こちら側も時間がないながら準備をしてきた、そういう経過があるということは伝えていきたいし、現在作業進捗中ですがけれども、第3次教育総合プランの中でこのことを明確にうたっていくという形で準備しているところであります。

今回のこの協議題に関する背景ということで申し上げさせていただきました。

町 長) ありがとうございます。どうぞ、皆さんから、具体的に説明等で何か確認事項ございますでしょうか。よろしいですか。

そうしましたら、お話の中で今後の展望について皆様お話しいただきました。まず今後のことということで、事務局のほうでも今回、返町さんからお話ございましたけれども、コミュニティスクールに向けてということは議論を重ねてもらってございます。町の現状として、濱名さんから総括をいただければと思うんですけども。よろしいですか。お願いします。

学校教育課長) まず、葉山町におけるコミュニティスクールの取り組み状況について、ちょっとお話をさせていただきます。

具体の取り組み状況から申し上げますと、コミュニティスクールについては理解をまず深めていただくために、昨年1月に定例校長会議を開催しているのですが、そこに教頭先生も招いて、コミュニティスクール化を推進している、県央地区の厚木市より講師を招聘しました。厚木市は小学校23校中23校、中学校が13校中13校が全てコミュニティスクール化を行っていて、指定率は100%になっています。その中でも一番取り組みが進んでいる厚木市立依知南小学校の校長先生と、地域のコーディネーターの方をお招きして、「学校運営協議会制度の導入の成果と課題」というタイトルでご講演をいただいて、まず管理職の皆様方にご理解を深めていただいたのが第一ステップになります。その後、葉山町でコミュニティスクールを実施する上で、学校や家庭地域と連携・協働のあり方を研究・検討していくために、今年度からコミュニティスクールのあり方検討会議を立ち上げました。年3回実施している最中です。その中で今後の葉山町としてのコミュニティスクールのあり方や課題等々について協議を行っております。

今申し上げたのが具体の取り組みとなります。今後、町としてコミュニティスクールをどのように進めていくかという、今後の展望についてですが、来年度内に加藤校長からもご指摘あったとおり、教育委員会として関連規則の改正、それから要

綱等を作成しまして、令和3年度にはいずれかの学校1校を、最初のコミュニティスクールに指定をしていきたいと考えています。その後は順次、指定を進めていきまして、最終的には町内6校全ての学校においてコミュニティスクール化を行っていききたいなというように考えております。

また、先ほど部長からもご説明があったとおり、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第47条の6の改正がございまして、平成29年4月に施行されています。コミュニティスクールの機能については主に3つございまして、学校運営に関する基本方針を承認する合議体だということが1つ目です。それから2つ目として、学校運営に意見を述べるができる機能も有していること、3つ目の機能として、教職員の任用に関して意見を述べるができること。この3つが主な機能になってございます。今申し上げた平成29年4月に改正された法の中では、特に3つ目に挙げました教職員の任用に関する意見の範囲について、教育委員会規則で定めることが可能になっております。したがって、これから町で進めていくに当たって、規則等を整備していく段にございますけれども、葉山町という小さい町の教職員の異動については、それだけでなく難しい現状もございまして、教職員の任用に関する部分に関しては、教育委員会が定める規則等に制限をかけて実施すること等、これから検討していきたいというふうに思っております。

町 長) どうもありがとうございました。それでは、委員の皆様からご発言等順次いただければと思うんですが、私のほうからですね、まず役場としての今の流れから検討してきたポイントで、端的にお伝えしたいと思うんですが。実は葉山町役場もですね、言ってしまいますと公務員、かつての平成の初期のころから、バブルが崩壊して経済が悪化して、公務員に対して厳しい目が向けられた時代がありました。それが公務員バッシングという言葉で、いろいろなものを削減すべきだというような流れを受けて、葉山町もいろいろなものを切っけながら、中には夕張市のように破綻する自治体もある、そんな時代を踏んできたことがありまして、行政も今までの大きな守備範囲で、あれもこれもやりましょうから、できることは地域に、できることを、やらなければいけないことを町がしっかりやりましょうというふうに、どちらかといいますと今の学校の先生方のお話のように、専従化するものが私たちの専門家としての力であり、できないところをやったりとか、やってほしいところは地域と一緒に考えながらやりましょうというふうに、もしくはアウトソーシングも含めて、そのころいろいろな考え方が入ってきて、今を迎えています。ですので、先ほどちょうど加藤校長から「協働」という言葉をいただきましたけれども、今の町役場の運営には、とっては欠かせない、非常に重要な政策手法になっています。昔の上意下達とかですね、予算至上主義な行政のあり方から、ボトムアップ方式でというわけではないんですけれども、協働でともに同じ目標を地域と見定めて、もしくはNPOとか、国や県の力も同じ目標に向かった、同じ立場として頑張ろう

というふうに今、社会づくりが進んでいますので、学校の皆さんの今のお話を伺っていると、全く同じような感覚をいただいて話を聞くことができました。

町役場として、もしそういった運営面で一緒になって考えられるものがあればいいなとも思いますし、私から、その上で1点だけお伝えしたいのは、他の自治体に比べるとという言い方が適切かわかりませんが、よく市民や地域の協力を仰ぐときに、基本、表現は適切じゃないかもしれませんが、性悪説というんですか、みんな悪い人なんだ、だからいい人だけを選ぼうとか、間違いがないように、事故がないようにするためにどうしたらいいかというところに力をかけてきた行政でもあるんですが、葉山の場合には私としてはむしろ、ほとんどの方々が非常に一生懸命でいらっちゃって、人としてもすごく立派な方が多いということから、そんな危険なこととか、リスクについてはあまり過大に評価をし過ぎることなく取り組める、非常にいい自治体にいるなというふうに、常日ごろ町民の方々に感謝をしながら、こういったことを考えてございます。

そういったことだけは初めに、皆さんもちゃんと十分お感じだと思うんですけども、葉山の町の特異性として、その上でコミュニティスクール化を図っていければ、すごくそれこそ無駄なところに力を入れることなく、みんなが前を向きながら、いい方向に進んでいけるんじゃないかというふうに思っているところです。冒頭に私のほうから、総合的な話で町の性質についてお話しさせていただきました。

では、委員の皆様からご質問でもご意見でも結構ですので、ぜひいただきたいと思えます。いかがでしょうか。

鈴木委員) 僕はね、さっき濱名課長から言われた厚木の取り組みは、ちょうど今、厚木が連合会の会長なので。取り組みはこうだ、ああだということになるんだけど、そんな難しく考える必要はないというふうに考えてます。厚木なんか、何で力を入れたかという、葉山なんかと違って、地域とのふれあいて、非常に都市化されてね、少なくなってるんですよ。だから何とか教育委員会指導、市指導でこうやっていこうと。僕なんかの時代からして、葉山は結構地域との学校との関係というのは、以前からかなり強くあるのでね。僕はだからそんなに難しく、こういう項目設けなきゃいけない、こうしなきゃいけない、こうなんだと。一緒じゃなくてね、むしろさっき滝川校長が言われたように、年を取られてくる方、年を取ってくる方とうまくつないでいける連携が取れるかなということのほうで葉山の場合大事なのかなと。

それから、例えば先ほど益田校長が言われたように、避難所運営のときに停電になったと。電気がないと非常にこたえるのでね、町のほうでも当然方策も考えてもらえるんだろうけど、僕は車を利用したらいいと。地域の方がね、車、ガソリン車であれ、電気自動車であれ、とりあえずエンジンがかかればね、アダプターのところから携帯電話を充電するぐらいのものは十分とれるんですよ。だから、

学校でももちろんそういうものを用意するんだけど、やっぱり地域の皆さんで車を持ち込んでくれる人がいればね、エンジンさえかけてもらえば、プラグがあれば、自分の携帯の充電なんて、もう楽々できるんですよ。そういう身近なものでも協力してもらえるとということも、一つの地域との連携なんだろうと僕は思っているの、格好のいい文章に書くような必要性はもちろんない。我々委員会としては必要なんだけど、学校サイドとしてはもっと単純な、今までの継続の中で上をいくというような考え方で僕はいいんじゃないかと、常々思っているんですけどね。以上です。

町 長) ありがとうございます。

小 峰 委 員) 今、6校の校長先生からお伺いしたことで、学校と地域の連携の中で、学校に対する支援はどこの学校も今までの地域のつながりを財産として、たくさんいただいてきたことを感じました。それをさらに進めて、今後の展望としてコミュニティスクールを目指していこうということが校長先生方の気持ちの中にあることも十分伝わってきました。地域とともにある学校づくりは今までも進めてできると思うんですけども、もう一つのそれに対する両輪になるべく、学校を核とした地域づくり、学校からいかに地域に発信して、地域が開かれた教育課程をもとにして、地域の中での教育力というか、そういうものを高めていくか、それを学校はどう発信できるのかということ、さらに課題が出てくるのかなというふうに思いました。

でも、今伺った活動の中にも、その要素があると思うんですね。お祭りに出ていく子どもたち、そういうことで地域を活発にするとか、葉山で言えば中高生議会が夏休みにあります。その中の中学生、高校生が議会で質問したことや発信したいことに、もっとこういうふうになれば地域がよくなるんじゃないかという思いがうかがえます。こんなバスを走らせたらいんじゃないか。この道に照明をつけたらいんじゃないかというようなことも、子どもたちは十分見ているので、学校からしてみたらね、いかに子どもたちを地域に出していくか、助っ人に出せるかというようなことを、これから考えていく必要があるのかなと思いました。

こういうことを言うと、学校のいろいろな先生方の仕事量がふえることになるかもしれないんですけども、先日岡山大学の地域教育専修で学ぶ大学院生が授業の中で、中学2年生の数学で、方程式を使った、コミュニティバスの運行表をつくらせる。そういう授業を提言したというのを見たことがありました。詳しくは今ここで説明できないんですけど、そういうふうに授業の中で、地域にかかわることを題材にして、子どもたちに考えさせる。それが実用化できるところまで、これから進めていくというようなこと。授業の中でも何を題材に、教材にするかによって、子どもたちが地域に出かけるというか、地域に発信できる力を、そういうことが学校を核とした地域づくりにもなっていくんだろうなということを思いました。

今で言えば、子どもたちが地域清掃をするとか、地域の方と何か一緒にするとい

うことで、地域の方も子どもたちもやってくれるんだから、自分たちも頑張らなければいけないというような気持ちにもなると思うんですが、今のように地域から支援をいただいて学校をやっていくということのほうが進めやすいというか、そちらのほうが早く進むと思うんですけれども。これから社会に開かれた教育課程ということを軸にすれば、片方が地域とともにある学校づくりが片方の車輪、もう一つの車輪は学校を核とした地域づくりというか、学校からも地域をつくっていくというものが、両方うまくやっていくようにしていくのが本当のコミュニティスクールなんだろうと思いますし、学校の難しさもそういうことにあると思います。先ほど南郷中学校の例で、台風の際の避難所となり、避難していらした方への心遣いで大変喜ばれたことは地域づくりへの貢献で車輪の一方も回したことになったのだと思います。ただ、あれだけのサービスをするという、それが学校の役目になってしまうと、地域の方としては喜ばれるかもしれないけれど、学校の負担というのはすごく大変なことだろうと思うので、その辺はどう考えていくかということが必要だと思います。2つの車輪、学校づくりと地域づくりがコミュニティスクールが実現する中でうまく回っていくことが望まれるなと思いました。

事前にしっかり調べ直してくればよかったですけれども、記憶にある中だけで申し上げます。アメリカの研究の中で、ソーシャルキャピタルという言葉を使っていたと思ったんですけれども、社会関係資本というかな。それが高い州だと子どもたちの学力も成績がいい。つまり、家庭が地域コミュニティへの参加、加入や活動すると、子どもたちの学業成績にプラスの効果だってあるし、子どもたちも地域参加が活発になる。それが循環されていって、ますます豊かな地域になるという、そういうような研究がされていました。多分日本でもそういう研究はあると思うんですけれども、そういう意味からいって、学校だけで子どもを育てるのではなくて、地域と一緒にいって、育てていくという、育てたい子ども像を共有することがこれからの日本にますます求められていくことだと思うので、校長先生方が今お持ちになっている地域の教育力みたいなものを活用する方法と、もう一つ、今度学校が発信して地域をどう育てていくかというところにも、難しいことだとは思いますが、ぜひ目を注いでいただけたらなと思いました。きょうはこれだけの資料を読ませていただいて、大変参考になりました。ありがとうございました。

町長) ほかにいかがでしょうか。

水沢委員) 大変興味深く発表を聞かせていただきました。ありがとうございました。このコミュニティスクールという発想は、葉山という地域にとっても向いている発想なんじゃないか。その前提の一つは、人口がすごく流動化してしまって、住む人がかわってしまうような地域ではないというところで、学校をいろいろと展開をやっていったときに、学校はすごくキーステーションにして、そこから展開して行く可能性は持っているという認識を強く抱きました。

私自身は美術にかかわる人間なので、この教育全体を見渡した適切なコメントができるか、自信はないですけれども、安達先生がおっしゃっていた真の地域リーダーを発掘することが重要かと思います。それとの関係性がないと、どちらかがどちらかに頼ってしまい仕事がふえるばかりです。そうではなくて、もう少し協働的な、おのずと自発的に生まれるような教育のあり方、理想ですけれども、それを探るツールとしてコミュニティスクールというのは考えていくべきなのかなと思います。葉山は、とても可能性を秘めていると改めて各校長先生のお話を聞きながら思いました。その前提としては、町長がおっしゃったような、この土地柄の特性もすごく信頼してよいのではないか、その前提で考えるといいかなと思いました。

1つだけ、私なりのちょっと理解が合っているかどうかわかりませんが、この中の要素にぜひカルチャーという意識も入れておくといいと思います。それが伝統的な米づくりとか、伝統的な木遣り歌とか、そういうものだけでない、もう少し広い、開かれた、ある意味インクルーシブな広がりをもって、そういう活動をしていく中で、地域の真のリーダーを見つけ、育てるといような何かプロジェクトプランになっていくと、実効性をより持つのかなという気がして話を聞いていました。そのときやはり続けられること、サステイナブルに、誰かをくたびれさせないように、そういう関係性を構築できるようなプログラムをつくっていくというのがとても大事なことかなと思って拝聴しておりました。

町長) その日本でも世界で有名な方もいらっしゃいますよね。

下位委員) 詳しい資料をつくっていただいて、本当にありがとうございました。コミュニティスクールがこれから実現に向けて動いていくかと思いますが、まずは地域に開かれている学校というのが前提にないと、なかなか地域の方々も入ってきにくいのかなと思います。

今、各学校が学校だよりですとか、そういったものを町内会に回覧板などを通じて学区内の地域の方へお知らせしていただいていると思いますが、私としてはもう少し開かれてくるといいのかなと感じております。例えばホームページを活用して、どんな方でも見られるような状態にさせていただくとか。なかなか個人情報なども入るので難しいかとは思いますが、IT をを活用していただいて、もっともっと地域に開かれた学校になってもいいんじゃないかという気がします。

主体がどこにあるのか非常に難しいと思いますが、葉山の場合は、先ほど鈴木委員がおっしゃられたとおり、地域とのつながりがもともと強いですよね。今、私も保護者の立場なんですけど、町内会の方とかNPOの方とかが、学校に関連して下さっているように感じております。地域が主体となるという、先進地の事例もあったというお話を伺いましたが、やはり学校が主体になっていたほうが安全なんじゃないかなというように感じております。地域で見ていると、もっともっと子どもたちにこういうことを教えてあげたいという地域の方はいっぱいいらっしゃい

ますので、その方たちが親切の押し売りになるという危険もはらんでいるのかなと思いますので、なるべく主体は学校にあったほうがいいんじゃないかという気がします。

ただ、校長先生、教頭先生、管理職は何年かに一度かわっていくわけですが、地域の方がコーディネーターとして学校に入ってきた場合は、その方々は5年も10年もかわらないという可能性が十分に考えられます。その方たちに学校を支配されちゃうんじゃないかなという危惧もあります。

あと、各校からの中で高齢化がという話も非常に多く出てきたと思いますが、葉山には地域で活躍している若手の方もたくさんいらっしゃいます。多くが保護者を持つ、もしかすると町立学校の保護者である可能性もあるんですけども、例えば中学校を卒業した後の元PTA、元保護者の方々の中にも活用できるような方がいらっしゃんじゃないかなと思います。町内会とか商工会とかが中心になると思います。例えば商工会であれば、青年部という若手集団もありますので、そういったところとも話をしていただけると、よりいろいろな活動をしていけるんじゃないかな、というふうに感じました。以上です。

町長) ありがとうございます。

教育長) あまり長くならないように、気をつけて発言をしたいと思いますが、今、下位さんが最後に発言されたところの中に、私自身もコミュニティスクールにとって大きな問題点になると考えた、思いついたことがあります。それはともにつくるという言い方を最初にしましたが、文字通りにともにつくることはできません。学校は学校教育法上に定められた公的な機関でありまして、それを担うのはやっぱり専門職である学校教職員です。教職員はまさにそういう使命を担っているということを法律的にも位置づけられているわけなので、専門職である教職員だけがつくることのできるカリキュラムなんです。もちろん学習指導要領に準拠するわけですが、それをつくる教職員とか学校の責任を人に預けるとか分有するとか、そういう意味ではありません。それはしっかりと踏まえて、大事なことは、そういうことをどれだけオープンにできて、共有してもらおうかということだと思っています。あるいは、そういうものをつくっていくときに、オープンにし、説明をする中で、議論をいただいていく中で一緒につくるということが実質的に担保されればよいというふうに思っています。

ただ、教職員が一義的な専門職として責任を負っているということを忘れてしまうと、それは本当にゆゆしき問題になってしまうので、そこはしっかりと、まずは確保したいと思っています。なので、ともにつくるという言葉は強調する一方で、ある意味で比喩的な部分もあるわけです。そのこともご理解いただければと思いながら聞いていました。

まず、そもそも何でコミュニティスクールなのかということ、いつも私も考え

るんですけれども、つくりやすさとか現実的な条件の話ではなくて、何でそういう展望を要求されているのかということなんです。大きく言うと、これもいきなり葉山の現状から飛躍しているようにとれるかもしれませんが、やっぱりいろいろな言葉がある中で、ソサエティー5.0、来るべき、加藤校長は2050年問題とおっしゃいましたけれども、そういう社会が近づきつつある。しかも、ソサエティー5.0の中身というのは、AIとかIoTとか、それを全面的に可能にするような社会という側面、超近代社会、超現代社会という側面もある一方で、とりわけ日本の社会に顕著だと思いますけれども、少子高齢化みたいなものの影響が、もう至るところに出ているわけです。そういう高度な技術社会、超高度技術社会を迎える一方で、現実的な社会の存続そのものにかかわるような、そういう少子高齢化社会みたいなものを同時に抱えている。ほかにもグローバリズムとか、いろいろな問題を加味していったら、来るべき社会の姿をイメージすることはできますけれども、そういうさまざまな要素も加えた上で、あえてソサエティー5.0と言わせてもらいますと、そこではやっぱり、それこそ言い古された言葉かもしれないけれども、本当に複雑・多様で、未知数なことが多い。だから、具体的内容を指してそれができる人間というふうにつくっていくことが難しいんです。こういう技術を持った人間を育てれば、こういう職人を育てれば、こういう工業ができて、それで国際競争に勝っていけるとかということは言い切れないわけです。不測の事態とか、新しい事態が起きたときに、それに対応できるような能力というふうな、少し違った資質・能力が求められる時代になるのかなということも、強く意識しています。

コミュニティスクールも、そういう意味では新学習指導要領なんかで言っているところの新しいソサエティー5.0に対応するさまざまな施策の側面と、ほぼ軌を一にして生まれているような考え方なのかというふうに私は思っています。確かに伝統的に、日本の共同体的伝統から、地域からいろんな援助を期待できたから、一見すぐくつながりある部分もあるけれども、実は新しく、新学習指導要領が言っているような社会に開かれた教育課程の実現とか、あるいはそれをやるための手法としてのカリキュラムマネジメントです。こういったものと、それからさらにもっと言えば、主体的・対話的で深い学びを実現することによって得られるような新しい資質・能力の育成という、そういったことと実は同じ流れの中で位置づけられるべきものだというふうにも思っています。

それは何かといたら、未知数で複雑多様なそういう社会においては、教員だけじゃ、あるいは教員は大学までの養成課程で一応、専門職の下地をつくってきて、あとは実際に職場で経験を積みながら、さらに習熟していくわけですが、それだけではなかなか対応できないことが起きてくると思います。先端技術の問題もそうだし、それから少子高齢化と合わさっていくような地域コミュニティの崩壊についても、教員が自分たちだけで修得した知識・技能では対応しきれないと思うん



です。ですので、地域からの熱い支援みたいなものを加味していかないといけない。そういう情報を得て、そういう支援を得て、自分たちが専門職として教育課程をつくり、その教育課程を説明し、十分に納得してもらって、じゃあこの教育課程のこの部分を実現するためには、地域のこの人たちが協力しましょうとかという関係が多分理想的な関係として生まれてくるのかなというふうに思っているわけです。

なので、よくこの手の議論をするときに、学校支援委員会ですか、地域学校支援みたいところが充実しないと意味がないという言い方がされるんです。確かにそれはそうです。滝川校長が言ってくれたように、分厚い地域からの支援を組織化したり計画化したり見える化したりすることでしょう。今までは自然発生的にばらばら行われていたもの、これはこれで十分手厚かったわけで、子どもには随分還元されたと思うけれども、それをこうやって体系的に、学校の教育課程の中に接合するように位置づけて、つくり直して、改めてそれにかかわるような人材なんかを、今度は学校側からの発信も含めて組織化しようという、そういうことだったと思うんです。それはすごく重要なんです。本当に、教育課程と切り離されたところで行事が行われたり、何か地域とのかかわりが行われたりするのはいくつか。今までは、自然発生的に、こういうことをしてみたい、こういう行事が大事だ、こういう地域の支援があるから、じゃあ田んぼをやってみましょうとか、教育課程から内在的に、じゃあ田んぼをやってみましょうみたいに出たんじゃなくて、こういうおもしろい試みがあるからまずやってみましょうという形できたんじゃないかと推測しているんです。今回はそれを教育課程のほうとの往復運動できっちり合うような形でつくっていくべきなので、そういう意味での地域支援本部のあり方みたいなものを考えなきゃいけないなと思っています。

一方で、そういうふうにも実際に助けてもらうとか、あるいは人的なパワーが得られるような、そういう実質的な実入りみたいなものがなくて、ただのおしゃべり会みたいなイメージで、こっちは二の次みたいな形で運営協議会を捉えるべきではない。ここでははっきり、承認という言葉を使っているぐらいだから、やっぱり、これまでの教育目標や学校目標や、その他の学校の重点項目について、つくり方自体を考え直すというところがあると思います。学校の内部でしっかりつくったものを、きちっと説明し、意見もいただいて、改めてそれを日々使って、1年間のサイクルにすると、益田校長がおっしゃったようなPDCAになると思うけれど、とりあえず最初のPの段階でそういう往復運動できっちりやっていくことです。もう一度言いますが、教員だけの知識では見通せないことが必ず生まれてくるはずだということが大事かと思っています。ただし、くどいようですけれども、文字どおりともにつくるのではなくて、そういう情報や知識や支援の力をいただいて、教員が専門職として自分たちがつくる教育課程の中にそれを位置づけ直してみることによってつくっていくということです。そのための協議の場なんです。

なので、これは自分の反省でもあるし、特に学校教育課長には代々強く申し上げているわけですが、教員の主体的・対話的で深い学びのための手引きみたいなものをハンドブック化したものを我々はつくったわけじゃないですか。ああいうものをなぜ公開してはいけないのか、教員のためのマニュアルだって、それを何で保護者に見せちゃいけないのか、私には全く理解できません。保護者にも、地域の人にも、見てもらえばいいじゃないですか。教員のために教員がつくったものだから、地域の人にはわかりづらい言葉だっていっぱい並んでいると思います。でも、わかりづらいことは、お尋ねを受けて説明していく。説明して理解してもらっていく、そういう責務を私たちは負っているのだから、それは私たちプロパーのものだからとか、あるいはわかりづらいからとかと言って遮断するわけにはいかない。どなたかが見えざる壁みたいなことをおっしゃっていましたが、そういうふうに、どうせだめだからみたいな、そういう発想を持たずに、あえてわかりづらいところも、共有しづらいところも出して行って、それを共有するような場として、この学校運営協議会では協議しなければいけないだろうなというふうに思っています。年間の開催回数は限られていると思うけれど、そういうのはぜひ第一番にやってもらいたい。最初のうちは難しいかもしれないです。お互いが使っている用語、ボキャブラリーの違いから始まって、そごもいっぱいあると思うし、学校側は、いろいろ助けてもらいたい、そういう思いもとても強いでしょう。一方、地域の人や保護者にとってみれば、あれも聞いてもらいたい、これも聞いてもらいたい、要望の投げ込み場所になっちゃう可能性もあります。そうじゃなくて、お互いに苦しいところもあるけれども、一緒に、さっき言ったように、教育課程を共有していく。教員がつくったものをたたいて共有していくという、そういう場としてお互いに寄り添って参画するというふうにつくっていかないと、なぜコミュニティスクールにしなきゃいけないか、理由がよくわからないと思います。

最初に戻ると、そここのところの共有がなければ、支援委員会を組織化すればいいだろう、体系的に整備すればいいだろうという話になっちゃうんです。そのことを考えるに当たって、つい先日、鎌倉第一中学校の研究発表で見てまいりました。やっぱりなかなかよかったです。葉山ではああいう全校を挙げて、同じ手法でみんなでチャレンジしてみるということがなかなかできていないので、早くできるといいなと思いながら見てきました。昨年度まで、よく茅ヶ崎のいろいろな学校を見てまいりましたけれども、ああいう研究発表のときに、保護者の方がいろいろ手伝ってくださるんです。その裏の事情を確認したわけじゃないけれども、今回、岡部校長がレジュメの中に一言お書きでしたね。ぜひ手伝ってもらいたいと思った。それは、今年、発表当番に当たっちゃったから、PTAは悪いけど手伝ってくださいではなくて、学校ではこういう必要があって、こういう研究をしている。この研究の中身も、まずもってPTA、保護者の方に理解をしていただいて、その上でこの研

究をさらに進めていくためには、ここで研究発表をし、批評の機会を得て、さらに向上するような場をつくらなきゃいけないんですというふうにして、それで支援を得るべきなんです。そういうことを実際にある程度やっているんじゃないかな。実際にそういうふうに、共有や公開をしているから、多分あんなに負担なのに、手伝ってくれているんじゃないか。決して、たまたま順番でしょうがなくて回ってきたという研究のあり方じゃないですから。今、茅ヶ崎あたりでは本当に研究発表をよくやっているの、それに参画していただけるような努力を裏でやっていると思います。

もう一つ、すいません。いつぞやPTAの研修会でしたか、冒頭の挨拶の場で紹介させていただいたんですけれども、神戸のほうの学校の、中学校でしたか、そのPTA会長をされていた方が、「PTAのトリセツ」というおもしろい本をお書きで、私もすぐ読ませていただきました。なるほどなと思ったことがいっぱいあります。現行法に照らして、どうなのかと、正直難しいなと思ったところもあるんですけれども、でも、大事なことは、PTAを学校の下請機関とか、単なる形式的な承認の場にしないということです。そういうふうにしてしまうと、ただのやらされの場なので、誰も手を挙げないし、委員を募集するのが苦しいという状況になります。それを打破して、70人ぐらいいる、いろいろな係とか委員とか、全員立候補で決まっちゃうという恐るべき学校ができ上がったわけです。

それは一口に言ってしまえば、まさに自分たち自身が一緒に教育課程を検討する場に参画をし、それを共有するという喜びを味わっているからでしょう。ここで言ってる教育課程というのは、授業だけのことじゃなくて、行事とか、特別活動、全て含めて、それもまた広い意味で言えばカリキュラムです。そういうことに加わっているからできるということを私もあの本を読んで、なるほどと納得しました。自分も校長時代にもっと努力すべきだったと思います。何か学校に必要なときだけ、フルに活用させていただいて、大変申しわけなかったと思います。でも、あの本のようなそういうやり方も可能なので、あそこはPTAという、やや濃密な集団ですけれども、例えばあいったものが地域も含めて広がっていくような姿になれば、活性化した、コミュニティスクールのイメージに近いものができるんじゃないかなんていうことを改めて思いました。

そこで、葉山の話に戻ると、これは皆さん方もおっしゃっておられたように、葉山はこのコミュニティスクールの問題を検討する上で、おもしろい条件を持っていると、私もつくづく思います。私は横浜の人間なので、横浜市はご存じのように半世紀のうちに130万人ぐらいの人口が370万人になっちゃったという、そういうところなんです。ほとんどが、たかだか半世紀の間にどっと外部から入ってきた、そういう世界なんです。なので、特に上山口小学校について紹介されたような、あんな濃厚な地域支援なんかはないです。よく新聞の地域版で、どこそこ小学校で田植えしま

したとか、いも掘りをしましたみたいなことが記事になります。記事になるということは、ある種の希少価値があるというか、珍しいからやっているわけです。日常ふだんにそのことが行われていて、わざわざ記事にもならないぐらい、葉山の学校は、地域との濃密なかかわりに支えられてやっているんです。計画されているかどうかは別として。それは本当にすばらしい財産なんです。

それを生かすことはとても大事で、安達校長がおっしゃってくださったように、そういう既存のかかわりの中から新しいコミュニティスクールの核になるような人とか、人脈とかネットワークを発掘できると、つくりやすくなるんじゃないか。私もそのとおりだと思うし、ぜひ活用してもらいたいと思うけれど、一方ではやっぱりそれだけで終わらないところもあるということ強く感じています。それに安住してはいけなような側面があるというのは、運営協議会についてのさっきの話です。葉山らしい教育というふうに、よく皆さんおっしゃいます。そのイメージの底にあるのは、多分地域と一緒にやっている、あるいは地域に支えられているような活動や取組だと思ふけれど、それだけでこの新時代の課題に応えるわけではない。そういうことも十分に取り込みながら、もっと言うと、田んぼづくりなどの伝統的な行事あるいはそれを含めたいろんな行事みたいなものは、行事としてすごく教育上の価値が高いです。人の資質を育てる効果があるわけだけれど、でもそういう伝統的に、暗黙のうちに了承されてきた資質・能力だけではなくて、それを明確に位置づけ直して、ほかの教育課程内容との関係において、田んぼづくりの持っている意味とかというものをしっかり位置づけ直して、総合的に新しい時代に対応する。社会に開かれた教育課程というのは、今の子どもたちが大人になったとき、20年後、30年後に、その来るべき社会の中で生きていけるような力をつけるということだから、それを社会に開かれたと言ってるわけでしょう。そのための手法として、いろいろな外部人材も入れて、ゲストティーチャーも入れていかなきゃいけないし、それから教材の中に地域教材、これを取り込まなきゃいけない。そういう総合的なことを指して社会に開かれた教育課程と言っていると思いますけれども、そういうことを全部合わせてやっていかなきゃいけないので、葉山は恵まれた条件を持っているけれども、一方でそれだけではできないところもありますということをお互いに共有したいなというふうに思っています。

私どもがお願いするばかりなのですが、長い目で見ると、教員の負担軽減にもつながると思います。あるいは、ほうっておくと、もっと負担がふえちゃいそうな世の中の流れです。その負担を緩和していくような、そういう方向に活用することも十分可能な、そういう制度になると思います。でも、短期的には、新しい制度を入れるときは大変です。新しい制度を入れるのは嫌いですという、そういう先生方もいらして、やっぱり安全を求めるから、既得のあり方にすがっちゃうというところは強いと思うので、長期的にはだからこそやるべきだとは思ふけれど、短期的に

はきっと導入に当たって苦しいこともあるでしょう。こういった理念的なことを精いっぱい教員の間で説いていくことも含めて、校長先生方、管理職の役割、すごく大きくなると思うので、短期的には大変申しわけないと思っているけれど、でも、ぜひ一緒にやり遂げていきたい。また、そうしなければ、いろんな課題に対する克服の道筋は十分開けてこないんじゃないかということ強く考えています。

ここで議長である町長にお願いなんですけれど、コミュニティスクールの中で取り上げていかなければいけないいろんな課題がある。私は包括的に、ソサエティー5.0とか少子高齢化と言いましたけれども、ほかにもっと具体の課題がいろいろありまして、教育委員会事務局の各課のほうでそういう課題とコミュニティスクールのかかわりみたいなことをいろいろ考えているところもあると思うので、ちょっと報告を聞いていただければありがたいと思います。

教育総務課長) 教育総務で施設を担当していますので、施設の関係と、学校と地域の連携についてお話をさせていただきます。

町のほうでは、令和元年度、今年度から、みんなの公共施設未来プロジェクトというのを立ち上げています。公共施設の6割を占める学校が、今まで十分な整備ができないという問題を抱えていました。町を挙げて学校施設の正規のあり方を考えていただけたら、営繕の担当から財政から、多くの職員が寄ってですね、検討がいよいよ始まったというふうに思っています。

今年度に関しては、劣化診断を実施しまして、先日速報のようなものも出ています。大変厳しい結果でした。一番古い学校で一色小学校ですが、既に50年以上が経過しています。これから具体的な検討に入るわけなんですけど、単純に修繕をするというだけではなく、建てかえる場合との比較というの必要な状況になっています。建てかえというふうになりますと、最近二宮町ですとか南足柄市、三浦市などで小・中一貫校というのが新聞などで取り沙汰されたと思います。葉山においても、今後そういったものを検討しなければならないという時期にいよいよ来ているのではないかと思います。そういったことをこれまで検討する際は、どうしても教育委員会主導といいますか、行政主導で検討されることが多かったと思います。ただ、きょうお話に出ているようなコミュニティスクールというのは、そういったものを地域の皆様より身近なところで、地域の問題として、例えば学区というものをコミュニティベースとして捉えて、どうあるべきなのか。そういう議論をしていただくのは、全町的、町全体での議論も必要でしょうけれども、コミュニティスクールのような単位でも、ぜひ議論を深めていただいて、皆さんからご意見をいただくような必要があるのではないかと。葉山も、いろいろな施策をとってですね、人口が維持できれば、それは望ましいんですが、どうしても今の公の推計などを見ますと、子どもの数も減少する見込みになっています。我々教育委員会とすると、人口を維持することにも協力をしなければいけませんけれども、子どもたちが減った場合の

ことに備えるということも必要だというふうに思っています。

そうしますと、いずれにしてもこの学区というような厳しい問題ですね、こういうものに関して議論を避けられない時期がもう間近に来ているのかというふうに思います。必ずしもそれはコミュニティスクールで必ず議論が必要だということではありません。それから、直ちにやらなければいけない、議論を始めなければいけないという状況ではないかもしれません。ただ、施設係とするとですね、当面の修繕をするにしても、将来的に学校を何年先に建てかえるのかというのを想像しないとですね、当面の修繕の内容も決まらない。かねてから学校からご要望いただいているトイレなどのバリューアップもですね、どの程度のスピードでやるべきなのかというのは判断もつかない。そういう状況を抱えておりますので、少し学校と地域の連携という話からそれてしまったかもしれませんが、コミュニティをベースとしたいろいろな形での議論のありようというものに関しては、施設を担当する部局としても関心を持って見ているということをご報告させていただきます。

町長) ありがとうございます。今のコミュニティスクールの話で、私、伺っていて、校長先生、本当に大変な時代、毎回大変なのかもしれませんが、本当に大変だなというふうに印象を受けています。

地域を巻き込んだハブになりつつありながら、また今の話ではなくて、施設的な課題も抱えていることで、本当に大変なお仕事だなというふうに思いながら聞いていたんですけども、私から申し上げるのは、先ほど防災の話もありましたけれども、もしやりにくさを感じる時にはですね、防災とか今の施設のメンテナンス等で、主体的に学校が抱えている課題ではない、一部客観的な立場で校長先生と先生方、また子どもたちのために地域の方も一緒になってという、目標を一緒にできる課題でもあるかなというふうに思いました。ややいきなりカリキュラムだったので、教員の任用がなんて話していらっしやると、お互いが当事者同士でぶつかり合いますが、外に少し置いてみてですね、お互いの危機感の中で、じゃあ保護者はどうしようかと、防災とどう向き合おうかというふうに議論していただくことは、非常にいいことなんだろうな。やりようによっては、やりやすいことなのかなというふうに思いましたので、ぜひ使っていただければと思いますが、我々も望んでいますので、ぜひよろしくお願ひしたいというふうに考えました。

学校教育課長) 今、教育総務課長の説明会の話を受けまして、学校教育課ですけれども、今後葉山町として中長期的に校舎の建てかえや葉山町の小・中学校のあり方に関して、小・中一貫校の可能性についても検討しなければならないと考えております。今後この壮大な課題に対して、施設、設備というハード面の検討とともに、学校教育課としてはソフト面の検討も進めていかなければならないと考えています。現在、本日話題に出していただいたとおり、コミュニティスクールの実現についても重点目標として掲げておりますが、もう一つの重点目標に小・中連携一貫教育

の推進・強化というものも重点目標として掲げているところです。

この小・中連携一貫教育の推進・強化については、平成27年に町の学びづくり推進事業を立ち上げまして、6校の小・中学校の協力体制のもとに研究を進めて、もう5年が経過しました。その中で得た成果については、各校の校内研究も進み、授業改善についての先生方の意識も高まりました。そして小・中校種を超えて授業を見ながら先生たちがともに協議し合うというところに関しては、本当に意識の高まりや取り組みも進められたというふうに感じているところです。ただ一方で、小・中の9年間を見通した教育、小・中一貫教育の視点においては、なかなか研究が進んでいないなというところも感じています。したがって、今後、小・中一貫教育における教科の系統性や連続性を踏まえた学習指導のあり方に関しては、もっともっと研究を進めていく必要があると認識をしています。今後研究を進めて、さらに小・中学校の先生方や学校の中で共有していくとともに、家庭や地域の方々にも発信していくシステムや、研究の成果をともに共有していく仕組みづくりが必要だと思っています。

コミュニティスクール化を今後進めていくに当たって、各校できちんと有効に機能していけば、小・中一貫教育の研究の成果などを学校・行政そして家庭・地域が共有し、合議した上で、学校運営の基本方針に取り組んでいくことも可能になっていくと考えています。

さらに、今後施設の部分で進めていく小・中一貫校の可能性についても、コミュニティスクール化をすることでそれぞれの立場で見る考え方とか視点をつないで、今後の学校施設のあり方等も含めて、建設的に話を進めていくことができる有効な機能になっていくと思っています。ぜひそういった意味も踏まえて、コミュニティスクール化や小・中連携、一貫教育の推進を重点的に進めていく必要があると考えています。

町長) ありがとうございます。ここまでで逆に校長先生の皆さんから質問だったりとか、この場で全体でぜひ伝えたいという意見等ございますでしょうか。

よろしいですか。委員の皆様、ほかにございますか。

そうしたら、事務局の皆さん、よろしいですか。では、井上課長、どうぞ。

生涯学習課長) 時間のない中、申しわけございません。先ほどから学校運営協議会、会議体を今後進めていくというお話が多々あったと思います。私のほうからは、生涯学習として、今までもお話にあったような、学校に地域の方が入られていた、個別に入られていた支援を、今後は地域・学校協働本部のような形でコミュニティ組織をつくり上げて、そこの代表の方がコミュニティスクールに入っていくというようなことを両輪に進めていけというようなことが国のほうが今、進めてきているので、そちらについても今後研究をしていきたいというふうに考えております。以上です。

町長) ありがとうございます。私のほうから、幾つか情報としてポイントをお伝えしたいと思うんですが。葉山の人口が、先ほど濱名課長から今後の中長期という話がありましたけれども、人口が如実に今、減少に向かっているのを感じてございます。直近の住基で、11月1日で3万3,057人という数字でして、平成25年に3万3,800人いたんですけれども、この6年間で800人減少が間違いなくありました。3万3,000人の町というのは間違いのないんですけれども、間もなく3万3,000を切るだろうというふうに見込んでいます。

同じような課題としてですね、出生数なんですけど、もうそれこそ10年前は母子手帳の発行数200を切ることはまじなかつたんですけれども、昨年150人を切りまして、本年も非常に厳しい状況にあります。子どもの出生が少ない状況にあります。ただ、高齢化率に関しましては32%、横ばいということで、現在でも上から10番目程度ですので、それほど進んでいる状況ではありませんが、人口は減っているというのは間違いのない状況になってきました。

その上でですね、町の形として申し上げることは、特に長柄地域を中心にですね、やはり転入の方は引き続き多くて、小学校1年生の数は毎年280人から300人前後いますので、半分が転入で葉山の人口は今、維持できているという状況になります。ただ、喜ばしいことだと思うんです。きっとそれぞれのご家庭ではですね、東京では、横浜ではということが、おっしゃる方もいらっしゃって、先生方が一番近くで感じられているところはあると思うんですが、例えばごみの減量化率がありますが、葉山町はもう5年目、平成26年の5月に戸別収集を導入しまして、無料の戸別収集なので、減量化率が伸びないだろうというところをですね、みごとに予想に反しまして、当時から20%の減量化率をずっとキープができています。今でもそれはキープしつつ、また資源化率も伸びている状況なんです。それは何かと裏返しますと、従来であれば外から来た方が新しい考え方で、そんなもの協力できるかといってもおかしくないところをですね、町のルールやあり方に従ってくれている。それが伸びているというところに関しましては、先ほど私が申し上げた他の自治体と違うという表現で合っているかどうかかわからないですけども、葉山と一緒に、大事にこの地域に住んで守っていこうと、この地域のルールと一緒に重なって、よりよく伸ばしていこうという気持ちで住んでいただいている方が多いんじゃないかなという数字として、今のごみの減量化率を申し上げました。

そのほかにもですね、きょうの話の関連ですけども、例えばポイントで上げると、つい先日、改元奉祝のコンサートをやったりとか、南郷公園に梓亭をつくりましたけれども、町からの出費は、梓亭に関してはふるさと納税を使った資材費だけでして、480万円。実際の建築施工は町の業者の方々が全てやっています。あと、改元奉祝についても、町の税金はほぼゼロですね。町民の方々の寄附金でやっています、運営も全て、私も一応メンバーには入っていますけれども、商工会長



を中心に、体育協会長、文化協会長等がですね、仕切りをして、コンサートができました。そうやって例えますと、葉山の町は 90 周年の記念誌だってまちづくり協会の方々、関東学院教授たちを中心に、素晴らしい冊子ができていますし、それ以外に、本当にいろいろなところで、地域の方が町をつくっていたのは間違いないこの町です。下位さんもそうですね、安全安心メールをつくっていただいて、それこそ今でこそ彼の関係としては切れていますけれども、無償で運用してくださいまして、そちらの無償が素晴らしいことを私たち町のほうで再認識をして、あえてちゃんとした経費をお支払いする仕事として今、運用させてもらっています。あれは下位さんからスタートした間違いないものでありますので、それこそ地域の方としてフォローを起こしたことがですね、こうした町の公式なものになっているというのは、葉山の珍しく素晴らしいことでありますけれども、ある意味スタンダードでもありまして、こういった流れを我々本当に胸襟を開いて受け止めながらですね、来るべき課題にそれぞれ向き合っていけば、そんな難しい話ではないのかなというふうに、きょうの話を伺って思いました。引き続きこういった場がとても大事ですし、私も先ほどちょっと申し上げた数字などについて、町の説明とかですね、葉山町が置かれている状況をもしてお伝えする機会があれば、学校に赴いてもやりますし、誰もが協力しようという気持ちがある町だと思っていますので、そこはほんと気兼ねなく声かけができるような関係をこれからも築いていくことが大事だと思います。どうか引き続きよろしく願いいたします。

それでは、大分時間も 12 時近くになってまいりました。ほかにこの場で伝えなければならぬこと等ございますでしょうか。

教 育 長) 協議題ではありません。単なる情報提供、番宣みみたいな話なんですけれども。今週の金曜日、夜 11 時、NHKBS1 で L G B T の方に関するドキュメンタリーが放映されると聞いています。なぜそんなことを言うかという、そこで登場する人物なんです、実は私が川崎高校の校長をやっているときに生徒として入学してきた、校長会議の場でも、L G B T の方に私が接した例としてお話をしてきた、その方が主人公みたいなドキュメンタリー番組になるらしいんです。大変素晴らしい方だったという、15、16 歳のころの記憶もあるんですけれども、その後の彼の成長についても、また今、L G B T の問題に関しても、いろいろ、さらに考え方が深まっていくというか、認識が深まっていく面もありますので、そういうことの参考になるかもしれないと思い、ご紹介させていただきました。

町 長) 先日、神奈川新聞にも書かれていましたけれども、さっき松尾鎌倉市長と逗子市長と一緒にいたんですけれども、L G B T についてはパートナーシップ証明を町も一緒になって出させてくださいという、歩調を合わせてやりましょうということを話してきました。むしろ、前回もその話をしていると思うんですけれども、返町さんの話もテレビで見たいと思います。ありがとうございました。

ほかによろしいでしょうか。

(その他)

町 長) それでは、その他の項目が次にございますけれども、事務局から何かこの点ございますか。よろしいですか。

その他、皆さんからよろしいですか。ありがとうございました。

それでは、本日の協議事項は全てこれで終了いたしたいと思います。事務局にお返しいたします。

(閉会宣言)

教育部長) それでは、長時間ありがとうございました。以上をもちまして令和元年度第2回葉山町総合教育会議を閉じさせていただきます。次回の日程については、決まり次第ご連絡いたします。時刻は12時でございます。ご苦労さまでした。ありがとうございました。